

## 在園二年間および三年間の

### 保育材に対する適応の変化

(運動能力)

神田寺幼稚園 小坂美保子

森崎君枝 阿部明子

二年保育児と三年保育児の保育材に対する適応の変化の中、運動能力の面から検討をしこれらを比較して考えられたいくつかの点をあげてみたいと思う。第一に能力の差がはっきり表われたのは年中組であって、これは三年保育児が一年間先に園生活をしたことの影響であり当然のことであろう。

スキップ、平均台を渡ること、そして低鉄棒での前回転に特にこのような差が見られたことは、やはり三年保育児が練習の機会を与えられたことよって、これらの能力が適当な発達をしてきたと考えられる。同時に私共の園の地域の特長、つまり家庭で殆んど身体を動かして遊べないことが考え合わされ、園での指導の重要性を物語っている。

例えば年中組五月には、一年目児はまだ固定道具を使用することだけを興味の対象としているが、二年目児は興味の範囲が広がり、固定遊具を使用しているも、それは遊びのほんの一部分であることである。勿論、社会性など他の面からも考えなければならぬことであるが、運動能力の点からのみ見ても、最初は固定遊具になれさせ、使いこなし、そして他の面へと発展させるといふ指導の過程が

ひきだせる。年長組になると、これらスキップなどでの差は解消してしまいが、体操、なわとびなどの、より高度な運動能力と身体各部の協応を要するもの、友達との協力が必要とする巧技台の使用に、その差が見られてくる。なわとびにしても、十一月で比較してみると、二年目児は数人の女児を除いては殆んどがとべないときれておるが、三年目児はとべる人、何とかとべる人、一とびごとになわを整える人が、各々三分の一ずつだと記録されている。

グループの遊びでも、九月では三年目の子ども達は自分達でグループを作り、自分達で工夫した遊びで行動しているが、二年目児は与えられた遊びは集団でもできるが、自分達からルールを決めたりすることは、特定の人を除くとまだできない。このように集団での行動、あるいは集団の中において養われると考えられるものには、やはり年長組になっても保育年数による差が表われている。

二年目児が跳躍を十回もするとすわり込んでしまう人が多いとあるが、三年目児にはこういった記録は見当らず、五月には体操祭出場のための練習をすると、すり足、小走り、二つとびなどよくできるようになる、とあるところから、ある程度練習をさせると自分達で上手になるまでは、やろうという気持が見られ練習にも耐えて行かれるようである。

一月になれば、上手にとぶにはつま先に体重をかけてとぶと良いことに気がつき、友達にもこのコツを覚えさせようと話し合う。

三月になれば、スキップ、ギャロップなどを自由表現にとりいれて表現するようになる。二年目児の方は、こういったことはまだ難しく、こちらの与えたことは充分できるが、なかなか自分達の表現として取り入れてはこないようである。体力測定値の差は、年長組になると縮まって殆んど個人差によるものとしか考えられなくなる

が、こういった社会性の加味されたものに差があることは、保育の効果と考えると良いのではないかと思う。次に考えられるのは、身体の耐久力と共に子ども達の意志、あるいは最後まで頑張ろうとか自分の力を一杯出しきろうとかいう気持の差があるのではないかということである。

七月の下旬の暑い頃年中組の一年目児は、気温や湿度の変動によって病氣も多く、集中力もぐっと異ってくるが、二年目児になると気温によって左右されることが少なく、年長組でも三年目になると、殆んど暑さ寒さに負けることは見られない。こういったことで三年保育児の方が身体そのものの耐久力も、鍛えられているように思う。また体力測定値の比較をしてみると、やはり能力や技術の上だけの問題でなく気持の持ち方にも影響されているように思う。特に他の項目では東京私立幼稚園協会研究部健康班で行なった調査の平均値を上まわっているのに、けんすい、片足とびの両項目のみが低くなっているのは、この意志の力の差、しかも地域の特性すなわち家族の中で雇い人にすっかり依存して生活していることの多いということが、はっきり表示されていると思う。しかし、三年目児の方が数値が高いのは意志の力がいくらかでも強いからではないだろうか。

以上当園児の運動能力の変化についてのべたが、幼児の運動能力は将来の運動能力を決定するといえる。成熟の時期に適した指導と学習が行なわれるために園での指導が重要であることを考え、特に都心の当園においては今後の保育での運動の扱い方を考えさせてくれた。

\*

\*

\*

(大会抄録65―68頁)

## 積木の構造に規定される

### 構成活動の一考察

お茶の水女子大学

黒江 静子

鈴木 隆子

積木は、フレイベルの恩物以来、幼児教育に好ましいものと考えられ、その種類も数多くつくられてきた。フレイベルは、恩物の中に単純で分割はできないが豊富な多様性を含む性質を考えている。この積木は、立方体、直方体、三角柱に等分されている。これらは、種々の形の基本になるもので、組み合わせ方によって複雑な影をつくりだすことができると考えた。

フレイベルは、幼児がこれらの積木をつかうことによって、全体と部分、形の大きさなどの概念を得ることができ、また、さまざまな形をつくり、つくりながら物語に導かれ、更に新しいものを構成しながら遊びを發展させることができると説明した。

フレイベルのあと、ヒルの考案した積木は、大きな筋肉をつかうことができるように大型のものになっている。この積木では、構成したものの中に体ごと入って遊ぶことができ、友人とのごっこあそびなどが發展することができる。

これまでの積木は、単純化された抽象的な形態をもつものと、具体的なものをもつものとのとがみられる。これとは違って、最近寺内デザイン研究所で考案された積木に、人・家・動物の象形積木がある。具象形態の様式化が切片にほどきられている新しい積木である。従来の抽象的な形態をもつ積木は、でき上るもの